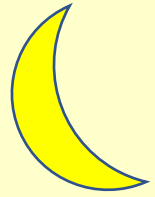


朔太郎と「デザイン」



「書物における装幀の趣味は、絵画における額縁や表装と同じく、一つの明白な芸術の「続き」ではないか。」（「装幀の意義」）

萩原朔太郎は自著の装幀に並々ならぬ情熱を傾けました。田中恭吉、恩地孝四郎ら若い版画家の挿画を多くとり入れた『月に吠える』のほかにも、川上澄生による装幀本や自らが装幀した書籍など、数々の美しい書物を遺しました。また、意匠を凝らした家具やデザイン、尖った屋根が特徴のモダンな自邸の設計など、日々の生活にいたるまで自身の美意識を貫きました。

* 恩地孝四郎（おんちこうしろう 1891～1955 版画家・装幀家。朔太郎の詩集『月に吠える』などを装幀）

* 川上澄生（かわかすみお 1895～1972 版画家。朔太郎の短編小説『猫町』では、表紙画・挿画を描く）



- ・『定本 青猫』表紙（猫の絵は朔太郎が描いたもの）
- ・『虚妄の正義』表紙（カラスのマークは朔太郎考案）
- ・朔太郎が自らデザインした椅子（復元品 前橋文学館蔵）
- ・世田谷区代田の家（朔太郎自らが設計した家）